

Title	宋元刊南北史・七史および隋書について(上)補訂
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.295- 300
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0295

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋元刊南北史・七史および隋書について(上)補訂

尾崎 康

前輯のこの稿は印刷に予想外の時間を要したために、執筆時・脱稿時に予定していなかったのであるが、校正中に台北で

中央図書館本を調査する機会が得られた。南北史の元刊本の一部に、それでも十分であろうという認識で、実見せずに諸書誌の解題によったもの、実査しないままに書目によってごく略述したにすぎない部分があったのであるが、この折にこれらを精査できたので、前稿の末尾の余白を利用してその結果をごく重要な点だけ、附注として提示しておいた。しかし、原刻本、および明初ごろまでの修印本については、正確な解題をしておく必要があると思うから、ここに多少の重複をいとわず、補訂として記述することにする。実際に原本に当たるといふ基本を怠ったために、このような変則的な方法をとることになったことを深く省み、恥じている。

南史

南史については、前稿一九九頁の上下段にかけて表示した中央図書館善本書目著録本のうち、1・5・8の五本を調査し

た。以下、この番号と前稿の解題の所載頁・段を掲げたいえで、詳述する。

元大徳一〇年広徳路儒学刊本

(1 一九九頁下段)

八〇巻 元大徳一〇年広徳路儒学刊〔元末明初〕修 四〇冊

A 〔明前期〕印 襖装 大半(七四巻弱)

B 〔嘉靖七・八年〕印 金譲玉装

卷七一・七三・卷七八第七葉・卷八〇(六巻余)

の同版二種の取合本である。現在はともに同じ淡鶯色表紙に改装されていて、B本は第三六・三七前半・三九後四分の一・四〇冊にあたる。このB本は料紙が縦二・五センチほど小さく、それで金譲玉装とされるのであるが、その中に明正徳一三・一六年の公牘紙の紙背を用いたものがある。

両本とも元末明初の補刻があり、とくにB本の卷七十二第一・二葉に刻工張伯上の修葉があつて、かれは隋書・唐書にはしばしば補刻刻工としてあらわれる者である。が、B本にもこの巻

次の中にはA本より遅い補刻はない。B本には補写葉が多く、版木にはたとえば上方の数段が横に大きく欠けて、しかも明代に補写された葉が五・六もあり、字面は漫漶というのではないが、かなり破損が進んでいる。したがって両本の印行には明らかに時差があり、A本は明前期か中期にかけてかと思われ、B本の公牘紙には正徳末年の一六年の文字も見え、次で嘉靖であるから、廃棄の年限をぎりぎりに見積っても、嘉靖八一〇年の南監二十一史のための補修のまさに直前、同七・八年の印の限定してよからう。補写葉は卷七一・七二・七九に各三、七九に九、八〇に一〇葉もあるが、これらがそのあと直ちに補刻されることになる。

しかし、前稿でも触れたように、北京図書館善本書目に「元大徳十年刻明嘉靖元年重修本」一二冊が著録されており、これは当然、鉄琴銅劍樓藏書目録および同蔵宋元本書目にも、所蔵の元刊南史八〇巻に、嘉靖元年修板がままあると記されている。これは当然、嘉靖元年の補刊年記が存在するのであるから、このB本にもこの六巻余以外のところに、それはなければならぬことになる。正徳一六年の紙背文書を使っているのに、その翌年の補刻がないはずがない。この六巻余の範囲では確認できないから、「元末明初」修としたが、嘉靖元年修は疑いのないところである。

その紙背文書は、よく見えないのであるが、正徳一三・一六の年記があり、浙江杭州府・同紹興府・同余姚県・同衢州府・同江山県・同金華府浦江県などから、南京光祿・同龍戸

衛倉・同潘陽右衛倉などへ食糧として送ったもののようにであり、方六・五ナセン、七ナセン、八×四ナセンなどの大型の官印もいくつかある。宋刊七史の魏書、次の隋書にも、年代にはかなりの相違があるが、同種の公牘紙がしばしば用いられているところをみると、この種の文書はさして保存を必要とせず、その保存の期間も短かったのかもしれない。

蔵印は前稿にも記したが、清の果恭親王印は補写葉にも捺されている。

なお、前稿附注(1)に訂したが、卷八〇末葉下象鼻の「桐学儒生趙良竇謹書／自起手至閣筆凡十月」の二行は、いまやこの本だけに残るものであるから、誤りは些細なことであるが、正確を期したいと思う。

(5 二〇〇頁下段)

存二六卷(卷四一七・一五・三八)
(四〇・四四・五四・六八・七〇)

一〇冊

元大徳広徳路儒学刊「明初」修 (北平)

薄赤茶色原表紙(三〇・四×一五・七ナセン)が「南史」の大型双郭「明」印題簽(外郭二一・五×三・四ナセン)とともに、第三・六冊に残る。他は新補唐草文焦茶色絹表紙、裏打補修。ともに粘葉装。卷四の首一五葉欠。

ほとんど原刻であるが、わずかに卷五第二六葉と卷七第一八葉は、同版であるが、明初の補刻にまちがいないとみる。

「広智退隠」「観書以進徳也竊／書虧徳幸勿為之」の墨印は、ほぼ毎冊首尾の匡郭外に捺されている。「京師図書／館收藏之印」。

存一七卷(卷二・三・六・七・一六・二〇・二二・二三・三四・四四・四六・六五・六七・六八首葉) (5 二〇〇頁下段) 七冊

元大徳広徳路儒学刊 [明初] 印 (北平)

後補青紫色表紙(三三・三三・二〇・七)、包背装。卷一九の首葉が欠け、一七巻の末尾に卷六八の首一葉が残っている。おそらくすべて原刻葉で、補刻は含まれていない。しかし、明代に入って刷ったもので、完全な原刻本とはいいがたく、たとえば前掲本のように卷七二が存すれば、補刻の張伯上の葉がある可能性が濃いと思われる。刻工名は僧玉山 玉山 僧徐章宗 甫 共。「京師図書／館收藏之印」。

以上三本を通じて、1のB本を除いては、版木の状態もさほど悪くなく、南史は明前期までごくわずかに補修されただけで、時折、印行されていたもののように思われる。百衲本にはこれら当時の北平図書館本の一部に利用しているのであるが、なぜもっと積極的に用いなかったのか解せない。

明初覆元大徳一〇年広徳路儒学刊本

存四四卷(卷一・一八・三七・四六・六五・八〇) (7 二〇三頁上段) 六冊

[明初] 覆元大徳広徳路儒学刊本 (北平)

後補藍色表紙(二八・七・二〇・一)、「南史本紀 卷一之四」のような墨筆題簽、包背装。

南史目録に次いで本文に入るが、広徳路儒学刊本にほぼ忠実な覆刻である。首葉の匡郭は左右双辺(二二×一五・五)。

補刻はない。刻工名については、次掲本のところで扱う。「京師図書／館收藏之印」。

(8 二〇三頁上段)

存三二卷(卷三四・三七・四二・六六・七一・七三) 八冊

[明初] 覆元大徳広徳路儒学刊本 (北平)

後補薄青綠色表紙(二九・五×一九・六)、「南史列伝 三十四之三」のような墨筆題簽、包背装。

前掲本と同版。ほぼ同印。したがって、補刻はない。

「晋府／書画／之印」「敬徳／堂／書印」「京師図書／館收藏之印」。

刻工名は前稿に二度にわたって表示したが(二〇三・二一四頁)、今回新たに採録して前表に追加記入できなかった者を、ここに掲げる。二一四頁の表の方が利用に便利であるから、これの南史の項への補遺とする。

2 十五 3 子和 子得 子徳 5 以善 正彦 11 郭名遠
陳屋 12 黄于 黄以実 黄洪 黄允 15 劉子和 劉行

北 史

北史については、前稿二〇七頁所掲の元大徳信州路儒学刊本を三部、同二一三頁下段と二一七頁上段の明初の覆刻本を二部、閲覧した。前者のうちの二部に、中央図書館善本書目に誤記があるばかりか、現在の架蔵の状況に混乱があることなども

判明した。

元大徳信州路儒学刊本

存六五卷 (存卷一・二・五・六・九一四・一七二〇・二三二
三二・四一四・四九・五六一六四・六八七一・七四一)
八三・八六一九〇・九五・九六・九九・一〇〇)

〔元大徳〕信州路儒学刊〔明初〕印 三三冊(北平)

茶色表紙(三六・五×二二・九センチ)、「北史」の大型双郭題簽

(外郭二二・五×三・五センチ)、粘葉装、明初印の原装であろう。右方に墨筆の目録題簽が補われている。

ところが、現状では、後補紺色表紙で包背装、大きさも縦四寸余、横二寸も小さい、装訂の異なる本が一冊、紛れこんでおり、その巻次は卷二と四であるが、これは装訂からも、もとの北平図書館善本書目の存巻次からも、次掲の存二六卷一三冊本の一冊である。そして逆にこの一三冊のうちに、この大型原装の一冊が混っていて、卷八三である。大陸から移送の間に混乱したのであろうが、一見して明らかであるし、とくに卷八三の一冊はやや小型の一三冊の中に無理に入れられているために、保管上にも問題がある。

中央図書館の善本書目 増訂本(一) 一二二頁には、現状によって著録せざるをえないであろうから、これを存六七卷三二冊、次を存二七卷一三冊とするが、やはり細部に混乱を生じている。卷二と四をこちらへ移したのであるから、紀二が重複し、三・四も存するのに、「欠紀二下至四……」と誤るもので、「二下」というのは、版心に「上」と離ってあって「下」がないための錯覚であろう。ここでは、この混乱が是正されることを期

待して、標記のような本来の構成をもって扱った。

目録を欠くが、本文首題は「魏本紀第二(低五)北史一」、左右双辺(二二×一五・六センチ)。版式一般については前稿の静嘉堂本のところに詳記したが、元末明初の補刻およびその刻工について訂正を要する。

まず、この本に元末明初の補刻葉は認められず、原刻とみなされる。二〇七頁上段の元末の補刻刻工五名は、百衲本について蔵印からこの本と判断して挙げたのであるが、百衲本は首尾の印と中味とは必ずしも同じではないようで、これらの巻にこれらの刻工の補刻葉はない。

次で、二一頁上段の表の「元末」と「明弘治正徳」の補刻刻工であるが、かれらはすべて「明初」の補刻刻工で、同期の者である。これを誤って二期に分けたのは、百衲本はこの本の存巻は当然これを用いているものと早合点して、これと静嘉堂本を対照し、百衲本にもあらわれる者はやや早いはずであるから元末、みえない者は明でやや間隔があるべきであるから弘治正徳ごろと推定したのである。しかし、実査した結果は、原刻のこの本と、明初修でかれらを同等に含む次掲本とを、百衲本がいわばごちやまぜに使ったのに惑わされたのである。

「京師図書／館収蔵之印」。

存二六卷

(卷九・一〇・一七・一八・三五・三六・
五二・五五・五八・六〇・七八・八二・
八六・八八・九一・九三・九五・九六)

〔元大徳〕信州路儒学刊〔明初〕修 一三冊(北平)

後補暗藍色表紙(三二・三×二〇・八センチ)、包背装。

前掲本のところに述べたように、その巻八三の一冊とこの本の巻二、四の一冊とが、相互に入れ違っているが、ここでは訂しておいた。

明初の修がごく数葉ある。巻八一に二〇葉も欠葉がある。

一〇〇巻（巻五四重複） 左の四本の取合本 九三冊

元大徳信州路儒学刊本 同〔明初〕修本 同至嘉靖通修本

〔明初〕覆元大徳信州路儒学刊本〔明〕修本

後補金砂子散し艶出水色表紙（二七・八×一八・四_{テリ}）、襷装。

巻五四は重複して二部あり、その一方だけは後補金砂子散し白桃色表紙（同じ_{大さき}）、「王印／猷臣」の印があり、巻首に朱句点が打たれている。

標記したように四本が取合わされて一〇〇巻を成しているが、これは傳増湘が一九三〇年、すでに四二巻を欠いていた楊氏海源閣旧蔵本を入手し、同版の端本を集めてこれに補配し、一〇〇巻に復原しようと努めたためのものである。このことはこの本に附された傳氏の跋と隻鑑楼蔵書続記にあり、前稿にも触れておいた。しかし、氏は信州路刊本と覆刻本を混合している。

今回、この本の全葉を精査し、蔵印との関係も合わせて表を作ったが、いまこれを整理するとはぼ次のようなことである。

まず、楊氏の蔵印は目録・巻一の二冊にあるだけで、五八巻にはとてもほど遠いが、海源閣本は相当に破損したことも想像できるから、押捺の葉が落ちたものを首尾だけ補った巻も少か

らずあるのかも知れない。ただし、目録は全葉が覆刻本で、その原刻一七葉・補刻一四葉であり、巻一は大半が元信州路儒学刊の原刻本で、覆刻本の明修葉が三葉だけ混っている。この点からは、すでに海源閣当時から両本が混合していたか、あるいは両本がそれぞれに所蔵されていたが、ともに大きく欠けたために残巻を合わせたか、のいずれかと考えざるをえない。ただし、海源閣蔵書目（光緒一三年跋刊）およびその後楊保彝が編んだ海源閣宋元秘本書目（民国二〇年 山東省立図書館刊）には、北史は一本も著録されてはいない。

次に、版の別からみる。元大徳信州路儒学刊本の原刻が全葉を占める巻が、計三八巻ある。巻三・四・六・九・二〇・二六・二八・三一・三四・三六・三七・三九・四八・五二・六〇・七四・七六・七八・八〇・八三・八八・九二・九三・九五・九六である。

やはりこの原刻葉が一卷の大半を占め、一と六葉程度のごくわずかに、補刻または覆刻葉を含む巻が、同じ三八巻ある。このうち二巻、巻八一・八九にはそれぞれ四・一葉の明初補刻が、六巻に明初補刻と覆刻の葉とがある。嘉靖修葉と覆刻葉については後述するが、欠葉に補配されたものとみられるから、これは大徳刊明初修本である。北史の明初修は非常に少いから、先の原刻としたものもあるいは同印かと考えられなくもない。

この七六巻のうち半分強には蔵印がなく、二〇巻余に「曾經我眼」印が、一〇巻余に一部は前者と重複して傳氏の諸印が押

されている。曾經我眼印は、季振宜や楊氏の諸印と併用された例はなく、いまのところ誰の蔵印かわからないが、覆刻本にもないから、この大徳信州路刊本は、かなりの残巻を傅氏が得てこれを旧海源閣本に合わせたものかと思われる。

この本のなかに、嘉靖修葉が二巻にわたって三葉ある。巻七の一葉は補刊年記はないがたしかに嘉靖の字様であり、この巻は大徳刊本が大半で、覆刻本の補刻一葉とともに補われたものようである。巻四三の二葉は嘉靖二年修であるが、この巻は覆刻本の補刻葉が主体のところ、逆に大徳刊の原刻一葉とこの二葉とが配補されている。すでに配補といったが、この状態からこれら嘉靖修葉は本来これらの巻を構成したとは考えられず、傅氏が他から取って欠葉に補ったものと思われる。

いままでも触れてきたように、この一〇〇巻のうちには大徳本を明初に覆刻した本がかなり含まれている。その一五巻は全葉が覆刻本であり、五巻にはごく数葉の大徳本が補配されている。これらは覆刻本でもほとんどが粗黒口の補刻葉ばかりの本であり、その原刻葉はただ六巻にわずか一〇四葉づつ残るにすぎない。蔵印は傅氏のもので二巻にみえるだけで、他にはない。したがって、楊氏印のある目録はやはり覆刻本であるが、原刻が過半を占める点でも異り、この二一巻も傅氏が大徳本とともに配補に用いた本であろう。

そして、巻二七は、やはり印記がなくて傅氏による配補本であろうが、第一・二葉が覆刻本の原刻、三〇一三葉がその補刻、一四〇二八葉が大徳本の原刻であって、一巻のうちにさえ

たがいに取合された典型的な例といえる。

以上を総合して、当初の楊氏海源閣本がよくわからないが、目録および巻一を除いては残巻どころか残葉がどれだけ存したのか疑問であって、傅氏が別の大徳本、その覆刻本の補刻本を合せて主体とし、それらの欠葉をまたあちこちから補ったものと考えるのである。

明初覆元大徳信州路儒学刊本

覆刻本は、前稿二一三頁下段の存六九卷二六冊を再び、二一七頁上段の存九一卷三〇冊を初めて調査してきた。

前者についてはとくに追加することもないが、二一四頁上段第三行の「〇第七・八（巻二〇・二七）冊」は「八・九」の誤記であった。

存九一卷（欠巻二二・二四・二九・三〇・三四・六〇・七九・八〇） 三〇冊

〔明初〕覆元大徳信州路儒学刊本 （北平）

改装後補藍色表紙（二八・五×一九・三ナシ）、包背装、襯紙を挿む。北史目録は首四葉欠。巻一首葉は左右双辺（二一・一×一五・七ナシ）、首題・行格等は大徳本と変らない。原刻本で補刻はないが、欠葉が非常に多く、とくに巻三二はわずか存一葉で、この前後の巻は数葉ないし一〇数葉が続けて欠けている。補写が三葉、大徳本による補配が巻七五に一、七六に九葉、七六の大半という不全本である。

「晋府／書画／之印」「敬徳／堂図／書印」印が第二冊の首尾だけにある。